



カントウータ

Cantuta

No. 33



ウユニ湖畔の小高い場所から仲間を見守る2頭のリャマ：コルチャニ村にて
(撮影者 椿 秀洋)

- | | | | |
|-----|---|-------|------------------|
| 1 | 高山病の思い出 | | 黒澤 啓 |
| 2 | ラパス日本人会の将来像について | | 桑原 健一 |
| 3-1 | 忘れられない記憶を残した旅(下) | | ヒメナ・ナガシロ |
| 3-2 | Viajes que crearon recuerdos inolvidables (Segunda parte) | | Ximena Nagashiro |
| 4 | じゃがいもの旅の物語(連載22号) | | 杉田 房子 |

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

1. 高山病の思い出

元在ボリビア日本大使館 二等書記官
黒澤 啓

1984年7月から1986年8月までの約2年間、ラパスの日本大使館に勤務した。赴任する前の数ヶ月間、外務本省の中南米一課に研修を兼ねて勤務していた際、目の前の席に座っていたのが、現在の日本ボリビア協会の椿会長である。「ボリビアとはくろちゃんも大変だね」と言っていた椿さんが、30数年後にボリビアに大使として赴任するとは、ご本人も夢にも思っていなかったことと想像する。

さて、ラパスといえはすぐに思い浮かぶのは高山病である。高度4000mを超える空港から坂を下って街の中心部に降りて来てもまだ3700m、そこからさらに低い高級住宅街でもなんと3200m位はある。

当時、日本から様々な調査団が来訪したが、目安として大体4人に1人は、程度の差こそあれ高山病に罹っていた記憶がある。後頭部が重く痛んだり、動くのも辛い倦怠感など罹ったものにしかわからない厳しさがあり、酸素を求めて少しでも低地に近づこうという思いからか、ホテルではベッドではなく床に寝る人もいたほどである。

さて、かくいう私も、寝込むほどではなかったが、着任早々軽い高山病に見舞われ、半日苦しい思いをした。その後は特に高地を意識せずに、普通にゴルフやソフトボールなどのスポーツを楽しんでいたが、食べ過ぎたり飲み過ぎたりすると消化のために酸素が余計に費やされるためか息苦しくなることがあり、家には酸素ボンベを常備していた。酸素は貴重なので、1分吸ってはしばらく中断し、また吸うことを繰り返したが、その時初めて酸素の「美味しさ」を実感した。さらにそれだけではなく「空気の重さ」も実感した。高地にしばらく住んで偶に旅行や出張で低地に降りると、最初は空気が体に纏わりつくようで、大げさに言えば空気を掻き分けながら前に進むという感じが

した。

空気が薄いというのは悪いことばかりではない。星空が綺麗に見え、当時（1986年2月）、何十年ぶりに地球の近くに来るというハレー彗星を見るために、連日連夜、4000mの高原（アルティプラーノ）に出かけて彗星を探したことは懐かしい思い出である。また、火が燃えにくいことから、タバコは灰皿に置いておけば自然に火が消えるし、火事がおきことは殆どないため、当時のラパスには消防車が2台しかないと言われていた。また、空気が薄いと揚力が弱くなるためか、旅客機が離陸の際になかなか飛び上がらず、ボーイング727の離陸までの時間を測ってみたところ、平地では30秒程度で離陸するのが、ラパスの空港では1分近くも掛っていて、慣れるまではちゃんと飛び立つのか不安に駆られていたものである。



写真1-1 1986年標高4000mの高原台地から見たラパス市内

あるとき、日本から来た鉱山関係の調査団が、酸素濃度測定器というのを大使館に持ってきて見せてくれた。地下の工事現場や鉱山などで酸素濃度を測定し、酸素濃度が通常の8割を下回ると警報音が鳴り響くというものであったが、案の定、大使館でスイッチを入れると測定器は鳴り響いた。日本の基準によれば即刻作業を中止するか、酸素を補給しなければならないらしく、それを見た当時の藪大使は、「我々は、本来は仕事しちやダメなんだ」と嬉しそうに言いながらも、自身も含めて

館員にも厳しく仕事をさせていた。余談であるが、藪大使は筆まめで、当時はパソコンはおろかワープロもない時代ゆえに、万年筆を使って達筆な字で、外務本省に対してこまめに公信を書き送っていた。大使公邸などでボリビア政府の要人を呼んで設宴をした際には、会食の最中に得られた情報を大使自らとりまとめて翌朝には外務本省に報告していた。

そうした中、東京から査察使が来訪することになった。査察使とは、全世界にある大使館や総領事館を定期的に回って、館員や在留邦人などにヒアリングしたり、公館の書類をチェックして問題がないかどうかを調査する役割である。当時、大使を含めて7人しか本官がいない体制で、日系人への支援、政府開発援助、日・ボリビア関係の強化など多くの業務を抱えていたため、この機会に、大使館の増員や機能強化を査察使に陳情するとともに、高地での勤務が如何に大変かを実感してもらおうということになった。事前にいろいろと作戦を練ったが、高地の大変さについては、特に策を講じなくても、公邸での夕食会で少し多めに酒を飲ませればすぐに厳しさがわかるだろうということになった。

さて、当日、外務本省からは、後に最高裁判事まで勤めた高島氏を団長とする一行3名が来訪した。ラパスに2泊した後、同じボリビアでも低地にあるサンタクルスに移動し、移住地や領事事務所を視察するという日程であった。過密なスケジュールにも拘わらず、査察使一行は非常に元気で、高山病はおろか疲れの兆しも見せずに精力的に調査を行っていた。そして2日目の夜、一行と夕食会を兼ねながら勤務状況について自由な意見交換をするために、大使公邸に館員全員が集まった。事前の打ち合わせ通り、自然を装いつつ、館員が交互に査察使一行にそれとなく酒を注ぎ、ほろ酔いかげんにさせたと思った矢先、突然にテーブルを囲んでいた一人が、音もなく崩れるように椅子から転げ落ちた。作戦成功と思いきや、崩れ落ち

たのは査察使一行ではなく、館員である20代の女性の専門調査員であった。最初は、藪大使が館員に演技でここまでやらせたのかと思ったほどで、査察使一行もそう感じたのか笑顔で見つめていて、「もうそのくらいでいいんじゃない」とまで言わんばかりの様子であったが、その直後に演技ではないことが判明した。まるで狐が取り付いたかのように無意識のまま痙攣し始めたのである。これには一同驚き慌てて、当時のラパス消化器疾患センターのホフマン院長（その後、在京ボリビア大使）に来てもらって治療をしてもらい事無きをえた。査察使と一緒に夕食という緊張状態に高山病が合わさって意識を失ったらしいとのことであったが、それまで見たこともない高山病の病状を見て、改めて高山病の恐ろしさを実感した。藪大使は、倒れた専門調査員には申し訳ないが、期せずして高山病の怖さを査察使に知ってもらうことができ良かったと喜んでいて。



写真1-2 1986年ラパス市内の自宅から見たイリマニ山

翌日、査察使一行は高山病を体験することなくラパスを発ったが、後日聞いたところによると、その時点では、まだ前の晩の公邸での出来事には半信半疑だったとのことであった。ところが、サンタクルスに到着し、昼間の業務を終えてホテルに戻り、夕食後に査察使の部屋で一行が打ち合わせを行っていたところ、急に、査察室長が意識を失って倒れたとのこと。医学的にどうなのかは定

かではないが、高地を離れても24時間程度は身体が高地と同じ状況に置かれているらしく、ラパスの緊張から逃れて安心して酒を飲みすぎたところ高山病に罹ったらしいということであった。

日本に戻った査察使一行が出した結論は、同じ高地でも、メキシコやエクアドルなどの2000m級と、ラパスの3700mは桁違いであり、3000mを超える高地での勤務には特別の制度が必要とのことで、それまで年に2回、公費で認められていた4泊5日程度の高地対策旅行（酸素の多い低地に行って休養を取るための旅行）が、4回に倍増されることになった。この高地対策旅行に加えて、不健康地であるボリビアには年に1回、2週間程度の健康管理旅行が認められていたほか、当時はゼネストやインフレなどで極端なモノ不足だったことから、大使館員が交替でサンパウロに物資を調達に行くという買い出し旅行もあった。そのお蔭で、忙しい業務の合間を見て、2ヶ月に一度は、周辺諸国を訪問することにより、ボリビアのみならずいろいろな南米諸国の状況を知ることができた。まさに、専門調査員と査察使さまさまである。あれから35年。今でも高地対策旅行は年4回あるのだろうかと思ひ出したりしている。



写真1-3 1985年4月、大使館でシーレススアソ大統領を迎える戴大使（天皇誕生日レセプション）

最近では観光のため、ラパスを経由してウユニ塩湖を訪れる日本人客が急増しているらしい。高山

病への罹患を防ぐためには、必ず予防薬を事前に服用し、余裕を持った日程で訪問するとともに、到着後2-3日間は飲酒を控えるなど、慎重に行動することが切に望まれる。（終わり）

2. ラパス日本人会の将来像について

ラパス在住 ミュージシャン

ラパス日本人会副会長

桑原 健一

私がチャランゴという弦楽器と出会ったのは17歳の時であった。TOYO草薙さんというプロのチャランゴ奏者と偶然出会い、弦楽器が好きだった私はすぐに興味を持った。本場でこの楽器を習いたいと思い、初めてボリビアへ渡ったのが21歳の時で、その後何度か日本とボリビアを行き来したが8年前からボリビアに住み続けている。気が付けば歳も今年で35となった。

どこの国でも音楽だけで生きていくのは難しい。私の場合、ラパス日本語普及学校で教師をしている。先学期までは2年間主任教師を勤めていた。ラパス日本人会でも6年程役員をしており、今年は若輩者ながら副会長という重責を担うことになった。

さて、この寄稿では「今、日本人会に何が求められているのか、何のため、誰のために日本人会は存在するのか」について、私が常日頃考えていることを少しお伝えしたいと思う。

ラパス日本人会の現状

ラパス日本人会は在留邦人の親睦や互助、現地の人々との交流などを目的として1922年6月11日に設立され、第二次世界大戦や幾度も繰り返されたボリビアの政変、さらに超インフレなどの経済危機を乗り越えて現在に至っている。

来年2019年はボリビアに日本人が移住して120周年の記念の年に当る。その昔、日本とボリビアは非常に遠い国だった。現在のように観光旅行で

訪れることなど思いつきもしない時代であり、19世紀末に最初にボリビアに移住した日本人は、貧しかった日本からよりよい生活を求めてこの大地に降り立った。それらの日本人の中には商売などで成功し、一旗揚げたいという方々が多かった。南米に関する情報が少なく、言葉も不自由な毎日の生活の中で、同胞の存在がいかに大きかったかは想像に難くない。日本人会に入ることは明日を生きることと同じだったであろう。



写真 2-1 ラパス日本人会の外観

時は過ぎ、近年はウユニ塩湖観光のために毎年数万人の日本人がボリビアを訪れる時代になった。ネットで検索すればどんな国の情報でも手に入るこの時代である。現在は戦前や戦後直後のように日本での暮らしに困窮するなど、やむを得ない理由から「ボリビアに住む」という選択をする人は少ないと思う。日本人同士で群れたい人は日本を出ないだろうし、海外ならもっと日本人が多い都市を選ぶという手もある。日本にはない何か別の魅力を感じてボリビアへ来たのなら、わざわざ日本人会に入ろうと思わないのは至極当然である。

ラパス日本人会館は市街の中心に建物がある。館内には、ボリビア日本人移住資料館や日本語学校、中規模のイベントホールや日本食レストランがあり、このレストランはボリビア人にも人気で多くの人に親しまれている。私はこの場所がなくなったら寂しいと思う。しかし、年間 200 米ドル

ほどの会費を払ってまで会員になろうという日本人は残念ながら減っている。その理由は自分が会員にならなくても日本人会が消えるとは思われていないことや、自身への恩恵の少ない団体にお金を払う必要を感じないからだと思う。実際に会員であることで受けられる直接のメリットはあまり多くはない。

この会は人々の善意をベースとして成り立っている。専任の事務職員に給与は支払われているが、実態は担当すべきこと以上の業務を負担している。そして役員は名誉職で無報酬であり、年会費を払いながら仕事だけ増えるという役割を誰でもが簡単に受け入れる時代ではない。「日本人のための日本人会」という役割はすでに使命を全うしたのではないか。それならば新たな役割とは一体何なのだろうか。

ラパス日本語普及学校の現状

ラパス日本人会館の最上階である 4 階は学校になっている。土曜は子供たちを対象とした補習授業校を日本人会が運営し、平日の夜は現地のボリビア人や日系人の大人を対象とした日本語普及学校を「ラパス・ボリビア日本文化財団」という日本人会から独立した財団が運営している。

普及学校は 1969 年 11 月開校で約 50 年続いており、今は 5 名の日本人教師と 1 名のボリビア人教師が働いている。在校生は常に 170 名前後で、ボリビアでは日本語は英語や仏語などと比べて仕事や留学とは結び付きにくいなかで、これだけの生徒数にいることは驚くべきことである。

日本語学習のきっかけはアニメであることが多く、さらにテクノロジーや、ファッション、礼儀作法、武道、J ポップなど生徒たちの知識と興味は幅広い。直ぐ目の前の利益となるものが見えないにも関わらず、これだけの人達から興味を持たれる日本語という言語は世界でも珍しいのではないかと思います。

日本語学校に来るボリビア人の多くは間違いな

く日本好きであるが、この学校で日本語を学び日本人と交流していくことで、更に強力な親日家になっていくと私は信じている。



写真2-2 ラパス日本語普及学校の授業風景

一方、約170名もの生徒がいるにも関わらず、学校の経営は火の車である。その原因は、現モラレス政権の「被雇用者給与の引上げ政策」により、事務職員の給与を毎年4〜5%も上げなければならないことに加えて、中国語や韓国語学校との競争があり授業料の引き上げが困難なことがあげられる。因みに、現政権と親密な中国の語学学校では、中国政府の支援により無料で授業が受けられ、留学のハードルも日本よりずっと低い。韓国政府も自国のアピールに積極的で、Kポップのイベントを支援したり、韓国語学校を支援していると聞く。もしも日本語学校が経営上の理由から値上げをしたら、生徒離れが起きてしまうことが大いに危惧される。

安倍政権は南米の日系人に目を向け、日系人教育や日系人との関係強化に力を入れようとしており、それ自体は素晴らしいことだが、日系人に拘り過ぎるあまり多くのボリビア人との接点を作る機会を逃さないで欲しいと願う。日本政府の関係機関では「お金は出せないが、研修会などの支援ならできる」とよく言われる。ありがたい話ではあるが、日本語学校のような親日家を育てる機関

に「投資する」ということの意義をもっと重視して欲しいというのが現場の率直な声である。

音楽活動を通した日本とボリビアの文化交流

私はチャランゴが好きで、チャランゴを学ぶために14年前にボリビアへ来た。現地の人々との交流や演奏を通して多くの事を学んできたと思っている。3年前よりこちらに住んでいる日本人音楽家5名で「ワイラ・ハボナンデス」というグループを結成し新たな活動も開始した。日本のJポップなどをフォルクローレ音楽のリズムに乗せて演奏しているが、これが想像以上に好評を得ている。物珍しさや日本のアニメの人気のおかげで、フォルクローレをあまり聞かないという若者たちもコンサートに来てくれている。国籍、性別、年齢を問わず、自分たちを見に来てくれた人たちが笑顔になるとやりがいを感じる。



写真2-3 ボリビア在住の日本人によるフォルクローレバンド、ワイラハボナンデス

崇高な考えがあって始めたグループではないが、この活動こそ国と国とを結ぶものなのではないかと感じている。日本をアピールする機会にもなっており、日本が好きだと言ってくれる人が多くいるのは嬉しいものである。

昨年末には日本ツアーも実現した。日本人が日本の曲を元にしたフォルクローレを演奏するなんて、まがい物扱いをされて批判が殺到するのではないかと覚悟していたが、全く杞憂となりこちら

の想像以上の好評を頂いた。「folkloreは楽しい」「ボリビアにいつか行ってみたい」という日本人が増えたら本望である。今年も懲りずに12月に日本各地を回るので興味のある方はぜひ足を運んで頂きたい。

ラパス日本人会のあるべき将来像は？

日本人会が会費収入と会員からの寄付でなんとかやっていく時代は終わったと思う。「日本人会」「日本語学校」「音楽活動」、これらの経験を通して私が考えるラパス日本人会の将来像は「日本カルチャーセンター」なのではないかと思う。日本文化に興味があるボリビア人や、現地の人と交流したい日本人が気軽に出入りしながら交流を図れる場所になれば、この場所が存在する意義が大いにあると思う。個人的には今の4階建ての会館を10階建てくらいに改築して、時間貸し駐車場とテナントを入れて、その収入で運営したらどうかとダメ元で言ってみたが、金銭感覚のない夢物語と一笑されしまった。

しかし、例え夢であっても、日本とボリビアが身近に感じられ、日本語も学べる「日本カルチャーセンター」のような場所が、将来において実現することを切に願うものである。

最後に、この寄稿の内容は、全て私の個人的見解であることをお断りしておく。

(終わり)



写真2-4 ボリビア在住の日本人によるfolkloreバンド、ワイラハポナンデス

3-1. 忘れられない記憶を残した旅（下）

法学士

ヒメナ・ナガシロ

そして年月は過ぎ、私たちはここ日本に移り住んで新しい生活を始めました。ボリビアでの生活とは随分違っていますが、旅行をするという習慣を続けようとしています。

少しずつ家の近くの場所や、寺社や公園、博物館に行く事から始めました。できるだけ歩いて行き新しく目に入ってくるものをゆっくりと眺めながら、鎌倉や他の近隣の街角巡りをしました。川端康成の伝記で取上げられていた海浜の静かな場所の逗子にも行きました。彼の小説『雪国』の物語には大きく心を動かされました。この日本最初のノーベル文学賞作家に加えて他の作家にも興味を持ちました。三島由紀夫の『夜会服』や、今一人の受賞作家であり、彼の人生そのものが人生への頌歌であると言える大江健三郎の作品について読むことができました。

私たちの日本での最初の旅行先は猛暑のさなかの宮崎でした。ビーチはあまり騒々しくなく、五時には海から出るようにとスピーカーで放送がありました。特に郊外には訪れるのにより美しい場所がたくさんあり川中での壮観な花火大会を見ることができました。とても素敵な経験でした。

一年目の冬には三重に行きました。新幹線で名古屋まで行きそのあとは別の電車に乗り換えました。バーベキューをしましたが、寒さが厳しくて屋外では楽しむ事ができませんでした。鈴鹿のF1サーキットや遊園地に行き山も散策し、そこで最初の新年を過ごしました。

横浜にもっと近く、必ず訪れるべき伊豆半島や小田原、魅惑的な箱根にも行きました。沿岸の街道を通って熱海や伊豆の伊東に行き、そこで海が見える居心地の良いホテルで私の誕生日を過ごし、その後桜の花を見に行きました。

小田原を訪れたのは鉄道の乗換に迷ったからでした。本当は江ノ島に行きたかったのですが、電車

の路線をよく知らなかったので乗り過ぎてしまったのです。その機会を利用して城を見に行き驚かされました。

別の機会には浜松に行きました。美しい公園や様々な訪れるべき場所があつて、私は特に気に入りました。娘の学校が冬休みの時に、山梨にも行きました。埼玉に隣接する山の中にある人里離れたホテルに泊まりました。野鳥を観察するはずだったのですが、正直言って一羽も見られませんでした。替りに全ては雪に覆われていたのでホテルと人里離れた道を楽しみました。

これらの経験を一人の日本人通訳に話していると、横浜より北は夏に涼しい時に行き、南には夏が猛暑でない年の冬に行くべきだと教えてくれました。身をもって学んだことであり、これから先も頭に置いておきたいと思っていることでもあります。

京都への旅行も欠かせません。ゴールデンウィーク真っ只中には行くべきではなく、ハイシーズンで過ぎるまで待つべきだと学びました。家族ではいくつかのお寺を見ることしかできませんでしたが娘は運良く学生旅行でもっとよく観光することができました。

それから、東京へ行くときは車ではなく電車で行くほうがいいと学びました。道路が渋滞したうえ、駐車場を見つけるのは大変な苦勞でした。皇居や東京ディズニーランド、東京タワー、スカイツリー、お台場、様々な自然や展示会、歌舞伎座、ソーシャル・パーティーに出掛け、新宿や渋谷、それ以外の場所も散策しました。それでも一番東京を楽しんだのは子供たちでした。若者にとって、東京は輝かしく現代的で活気がありエネルギーに満ちた街だと思います。

旅行が実際に用心すべきことを教えてくれるということを考えると、注意深く無謀なことさえしなければ、私の子供たちは今だったら、ペルーの作家シロ・アレグリアの小説のようなこの「広くて遠い世界」の中を安心して旅行することができると思います。

これから先、私たちの旅行は違ったものとなるでしょう。子供たちは大きくなりました。前ほどの感動はなくなるでしょうが、より温和で穏やかな方法で楽しみ続けようとしています。私たちは思い出を作り続けるでしょう。そして、子供たちが思い出を、そして経験や物語を自ら作ってほしいと願っています。(終わり)



写真3-1 様々な思い出を作った日本での家族旅行

3 - 2 Viajes que crearon recuerdos inolvidables

(Segunda parte)

Por: Ximena Nagashiro

Licenciada en Derecho

Y, los años pasaron. Nos mudamos aquí a Japón e iniciamos una nueva vida, muy diferente a la que teníamos allá, pero tratando de continuar con esas costumbres de viajar.

Empezamos tímidamente visitando lugares cercanos a casa, visitando templos, parques, museos. Ir a pie, en lo posible, y observar con calma lo nuevo que se ofrecía a la vista, recorriendo cada rincón de Kamakura y otros lugares vecinos. Llegamos también a Zushi, un apacible sitio cercano

al mar, y que aparece mencionado en la biografía del gran escritor japonés, Yasunari Kawabata, cuya obra *País de Nieve* me conmovió mucho por su narrativa.

Además del primer Nobel de Literatura japonés, me interesé en la obra de otros escritores. –Pude leer *Vestidos de Noche* de Yukio Mishima y también acerca de la obra del premiado escritor Kenzaburo Oe, cuya historia personal en sí es una oda a la vida.

Nuestro primer viaje aquí fue a Miyazaki en pleno verano tórrido. Las playas eran menos bulliciosas, y donde mediante altavoces nos pedían que salgamos del mar a las cinco de la tarde. Había muchos lugares preciosos para visitar, sobre todo en la afueras de la ciudad y también pudimos apreciar un *hanabi* en medio del río con fuegos artificiales espectaculares. Una experiencia muy bonita.

El primer invierno fuimos a Mie, en shinkansen hasta Nagoya y luego tomamos otro tren local. Hicimos una barbacoa que no pudimos disfrutar al aire libre por el frío intenso. Conocimos el circuito de Fórmula 1 en Suzuka, parques de diversiones y paseos a la montaña. Allí pasamos nuestro primer y distinto Año Nuevo.

También conocimos lugares más cercanos a Yokohama, como la visita casi obligada hacia el sur de la península de Izu, Odawara y el mágico Hakone. Por la carretera de la costa llegamos a Atami, Ito, e Izu, allí pasamos mi cumpleaños en un acogedor hotel con vista al mar, para luego ir a ver los cerezos en flor.

Llegamos a Odawara porque nos perdimos, e

n realidad queríamos llegar a Enoshima, pero como no conocíamos la ruta del tren, nos pasamos de largo. Aprovechamos de conocer el castillo del lugar y quedamos maravillados.

En otro viaje, fuimos a Hamamatsu, una ciudad que a mí en particular me encantó, con sus hermosos parques y diversos sitios para visitar. A Yamanashi fuimos también en invierno cuando mi hija tenía días libres en el colegio. Llegamos a un aislado hotel en las montañas colindante con Saitama. Se suponía que debíamos observar pajaritos, pero honestamente, no vimos ni uno. Todo estaba cubierto de nieve, así disfrutamos del hotel y de pasear en sus caminos solitarios.

Contando estas experiencias a una intérprete japonesa, me indicó que para viajar y disfrutar mejor, hacia el norte de Yokohama se debe ir en verano cuando es más fresco, y al sur se debe ir en invierno cuando el verano no es abrasador. Este fue un detalle que aprendimos con la experiencia y que intentaremos tener en cuenta en el futuro.

No podía faltar el viaje a Kyoto, del que aprendimos que no se debe ir en pleno *Golden week*, sino esperar una temporada que no sea alta. Apenas si pudimos visitar algunos templos en familia. Mi hija tuvo la suerte de aprovechar mejor en un viaje estudiantil.

Y desde luego, los paseos a Tokio. Aprendimos que es mejor ir en tren, en carro no es muy recomendable, debido al tránsito lento en las carreteras. De hecho, encontrar estacionamiento era una odisea. Fuim

os al Palacio Imperial, Disney Tokyo, a l a Torre de Tokyo Sky Tree, a Odayba, feri as exposiciones de diferente naturaleza, teatro kabuki, reuniones sociales, paseos a Shinjuku, Shibuya, y otros más. Pero q uienes más disfrutan de Tokyo son mis hij os-. Creo que es una ciudad espléndida, m oderna, vibrante y llena de energía- para la gente joven.

Considerando que los viajes realmente ens eñan, manteniendo las precauciones necesa rias y sin ser imprudentes, ahora nuestro s hijos pueden viajar y desplazarse de ma nera natural a cualquier lugar-. Esto a s u vez les permite desenvolverse con mayor tranquilidad y soltura en este gran *mund o ancho y ajeno*, tal como reza el título de la novela del escritor peruano Ciro Al egría.

De aquí en adelante nuestros viajes serán diferentes. Mis hijos ya crecieron. Segu ro ya no habrá tantas emociones, pero int entaremos seguir disfrutando, de manera m ás sosegada y apacible. Seguiremos creand o recuerdos, y deseando a nuestros hijos que vayan creando los suyos, su propia ex periencia, su propia historia. (término)



写真3-2 忘れられない京都への旅



写真3-3 どちらが美男？鎌倉にて

4. じゃがいもの旅の物語（連載 22 号）

旅行作家

杉田 房子

最初は豚の餌にしてみた農民も害が無いと知っ て食用にする。アンデス山地では貴重だった塩はこ こではありふれているので塩をまぶす。バターをつ ける。葡萄酒にひたす。スープにも入れる。食べる 量も。料理の仕方も増える一方のじゃがいもー。

白い頭巾のピグーデンを被った女たちは、やがて 「稼ぎに応じて」じゃがいもを配り、男たちはそれ をナイフで食べるようになった。もちろん、じゃが いもはその頃には穀物並みにみられていたから、醸 造してお酒を造ることも試みられはじめていた。北 欧のスカンジナビア諸国にまで渡ったじゃがいも は、ラテン語で「生命の水」を意味するアクワビッ トという強いお酒の原料になり、北欧の寒さを吹き 飛ばす、まさに「生命の水」として愛飲されて今日 に至っている。

そういえば、オランダ名物のジンの原料はじゃが いもで、その香気と言いい強さと言いい、トウモロコシ から醸したお酒ともいえないようなチッチャを飲 み、パタタのじゃがいもを食べてパパミククとさえ 呼ばれていたアンデス山地の人々は、じゃがいもが 渡っていったあれこれ使い方を工夫したヨーロッ パの人の食生活と比べると、ナイーブそのものだっ

たのは、たしかであった。

しかし、貧しいと言えば農民だけでなく、国王にすら共通していたかもしれない。

神聖ローマ帝国の皇帝カール五世が退位した時、帝国にはスペインの金にして二百億マラベディスを超える借財が残された。カール五世はスペイン国王カルロス一世も兼ねていたので、三十七年間の治世で資金を融通し続けたスペインの大商人は、少なからぬ被害を受け、破産に瀕した者もでた。

スペインの次の国王フェリペ二世は、領土を世界に広げて「日の没するところなきイスパニア」を豪語したが、それでも1575年には国庫が空になり、支払停止令を発して、ヨーロッパ中を驚かせた。その時には、新大陸から入ってくる1か月分の金銀にも及ばない一億マラベディスを借りるのに、四苦八苦している。

スペインに次いで「日の没するところなき大英帝国」を築いたイギリスのエリザベス女王が、1558年に即位してしばらくの間、毎夜のように貴族の館を訪れまわったのも、貴族の歓心をひきながら女王の地位を固める術策と、宮廷の出費を節約しなければならぬ計算からきている。

オランダ人は、支配者のスペイン人が乞食を意味するゴイセンと呼んで軽蔑するのに怒り、独立運動を起こしたが、乞食呼ばわりしたスペイン人も、貴族のカバリエロは平民をペオンを蔑み、ペオンは農民のことを百姓どものプリエゴと蔑んだ。貧しいというなら、上から下まで、ヨーロッパ中の人間が貧しいようなものだった。

食事時のスープにも料理にも欠かせなくなり、男たちがナイフで切って食べるようになったじゃがいもに毒がある——という噂がヨーロッパ全土にぱっと広まったのは、身分の上下にかかわらず貧しかった食物を補うのに、じゃがいもがそれだけひろまっていたことを示している。

「葉や芽を食べたら。腹痛で苦しんだ」

「青い実を食べたら声がでなくなった」

ジャガイモの葉や芽には毒がある、と言うことはスペインが南アメリカのアンデスを支配し始めた頃、根拠地としたパナマに移し植えたじゃがいもを食べたスペイン人が苦痛とともに知ったことだし、それはインカの男女がスペインの神父にも知らせている。

「パパスの芽、食べるとお腹痛い。子供、死ぬ。イペカ草 噛む。痛くない」と教えたのは、大西洋を渡るよりも前、アンデスを離れて太平洋をパナマ地峡に向かっていった時だった。

ヨーロッパにイペカ草はなかったが、なによりも病気になると医薬と宗教と呪術がごっちゃになって、貧しい農民はただおろおろし、嘆き、恐ろしがるほかに手が打てない。フランスのガスコーニュ地方では、リウマチで痛む関節に肉切れを当て、肉片が腐りはじめたら犬に投げ与え、病気は肉にしみ込んで犬に移してしまった、というのが治療だったという。胡椒などの香辛料に目の色を変えたのは、ツンとくる香りと味が胃腸病に効く、と信じたからである。

そういう暮らしに、新しい食物が病毒をもたらしたとすれば、噂が噂を生んでも不思議はない。

じゃがいもが生まれた南米のアンデスには地震があった。崖が崩れ、大地がひび割れるのにインカの人々はおろおろした。大西洋を越えて根づいたヨーロッパ大陸にはほとんど地震はなかったが、その代わり、病魔が荒れ狂うのに人々はおろおろしている。

そういう大きな病魔は、噂が噂を生むような大きな出来事があると、きまったように襲う。ローマ帝国が中近東にまで権威を伸ばしたあと、ペストがやってきた。蒙古がヨーロッパを席卷しそうになったのちの十四世紀にも、またペストは大流行した。唇まで黒くして絶対に死ぬ恐ろしさは、黒死病という名でこの時からヨーロッパにしみついている。

「新大陸発見なんていうから、なにか起きると思っていたら——」

「金銀が流れ込んでモノの値段は上がるし、新しい食べ物には毒があるし——」

丸々としたじゃがいもは、毒のかたまりのように目の仇にされた。

すっかり熟すると、掘り出す前でも、自分の体に栄養分を貯えるために休眠するじゃがいもの天性さえ、気味悪がられる。長いこと土のなかでいた時のままでいたかと思えば、ある日突然、窪みから青白い目を生やす。コブを突きだしたり、つながった子イモができたりする。休眠や再成長、養分の移動などというじゃがいもの天性を知らなかった者には、奇妙な生き物なのではないかとさえ疑われた。

じゃがいもの毒は、アルカロイド系のソラニンであり、窪みのあたりに最も多い。芽はこの窪みから生えるから、芽に毒分が一番多いのは当たり前だが、それはじゃがいもが繁殖するための自衛みたいなものだった。

医薬と宗教と呪術がごっちゃになっていた人々には、もちろん、そういうことはわからない。第一にじゃがいもの植え方も、一個を丸のまま埋めて放っておく。芽は生えるにまかせる。種イモを縦に二つ切りし、切り口を下にして植えれば成長しやすいとか、無駄な芽はつみとらないと葉ばかり茂ってしまうとか、合理的な考えなど思い浮かびもしなかった。

1597年、イギリスのジェラードが書いた『本草書——植物図鑑』にでているじゃがいもは、もじゃもじゃと葉も根も生えるにまかせている。この図が、絵になったじゃがいもでは世界で初めてのものとされているが、描いたジェラードは医者と床屋の兼業で、それでも博学の人と敬われている。

それくらいだから、保存法や貯蔵法も知らなかった。じゃがいもどころか、麦の種モミの選び方や保存法、畑の肥料や薬剤などもまだはつきりしなかったその頃では、無理もなかったのだろう。麦は、水を張った桶に浮かべ、重くて沈んだのが良質だから種モミに。保存は塩と石灰を混ぜてまぶしたり、葡萄酒と灰を混ぜてまぶしたり漬けたりした。それで

は種モミの五倍ほどの収穫がやっとなのも当然だった。

しかし、1600年代の一億人が1800年代には二億人近くまで人口が増えるヨーロッパが、それでは飢えてしまう日が近づいていた。

じゃがいもを、ヨーロッパで毎年きまって畑に植えた正確な記録は、オランダのクルンデルト地方にあって、1739年の遡るものが一番古い。

ただし、栽培者はなんとたった一人の農民。麦との輪作で、わずか半ヘクタルの畑にじゃがいもを植えた。

翌1740年も一人だが、41年には三人に増え、面積も三ヘクタールへ。そのあとは56年の九人、面積十三ヘクタールまで増えたところで記録は終わっている。40年と41年は、オランダからフランスとドイツの北部にかけて凶作、飢餓に見舞われた。クルンデルトで唯一人から始まるこの栽培記録は、その後の人と畑の増え方で、じゃがいもが無かった時代の凶作、飢饉の有様をしのばせる。

実際、ヨーロッパの各地には何年かおきに、きまって凶作がやってきた。凶作のあとは穀物が値上がりするから、飢饉と物価高の二重苦が、いつも人々につきまとった。

アジアへの航海記を、ポルトガル人で初めて書いたジョアン・デ・バロスに、1503年にリスボン港を出発する前後の情景を「ペスト流行、1日に120人も死ぬ。三年つづきの飢饉の後の悲惨、目を覆う」と記している。

1769年と71年はほとんどヨーロッパ全土、70年から72年にかけてはフランス中心——という凶作と飢饉の歴史は、その間の物の値上がりを入れれば、二重苦にとどまらない死を迫るものですらあったに違いない。

あの人たちは、なにを騒いでいるのかえ

王妃さま、パンをよこせと叫んでいるのでございます。

おや、パンがないならケーキを食べたらよかろうに

フランスの国王ルイ十六世の王妃マリー・アントワネットが残したこの挿話は、王妃が断頭台で生涯を終える四年半前、不作のあとのパンの値上がりでパリ市民がベルサイユ宮殿へデモ行進した時に生まれた。フランス大革命の発端ともされる、この行進は、1788年十月五日のことである。

こうしてヨーロッパ中をさいなむ飢えと貧しさは、農村では土地を離れる人、都会では職を失う者を続出させた。それは海峡を越えてイギリスも同じで、1508年に即位したヘンリー八世の頃に、もうすでに都会は浮浪者にあふれ、その救いのなさが、地上にはあり得ない理想国家『ユートピア』をトーマス・モアに書かせている。

そうしたなかで、種イモ一個から十個、二十個と実るじゃがいもは、狭い荒れた土地にしがみつくしかな農民を救った。ヨーロッパの北国の寒さも、南米アンデス山地の冷え込みに比べれば物の数ではない。地方もちろん都会の近郊でも栽培されるようになったじゃがいもは、やがて街頭にふかしじゃがいも売りまで登場させた。

1816年に描かれたロンドンのヘイマーケット風景には、湯気の立つ釜にポテトの看板を下げたじゃがいも売りが、何人も立っている。

このイギリスと隣りあう小さな島国アイルランドでは、じゃがいもの出来、不出来が死活をきめさせた。南米アンデス山地のインカの人々が見たら自分たちとまったく同じ暮らしだと思ったに違いない。

種イモを縦に二つ切りにしたものを植えても、収穫が変わらないどころか育ちがいいぐらいなのを発見したのは、食べる分を一個でも多く残したい貧しさからきている。無駄な芽をつむのは、葉を茂らせる養分を根茎に回したらどうか、という知恵が生んだ。畝の土を山型に盛り、一メートル半ほどその畝の間をあける考えも、北国の太陽の温もりを少し

でも多く浴びさせたい工夫だった。

アイルランド方式とまで呼ばれたこのジャガイモの栽培は、イギリスへ渡り、さらにヨーロッパ本土へ広まっていく。

しかし、アンデスの澄んだ大気と、馬も牛も知らない土で生まれ育ったじゃがいもには、そうしてひろまっていく間の土、人、動物、時にはその土地の植物までもが不健康であり過ぎた。ネズミやモグラ、害虫はまだしも、人間さえもおろおろするだけの病気となると、抵抗のしようがない。どす黒くちぢかんでしまう萎縮病、葉は枯れ、茎は腐ってしまう胴枯れ病などじゃがいも特有の病気——。

ヨーロッパ大陸では、フランドル地方で1779年にじゃがいもの病害が起きているが、1845年にはアイルランドも襲った。翌46年も病害は居座って収穫を半減させた。次の年、病害はどうやら去っていったかのように見えたが、翌48年には、まるで地震の揺り戻しさながらに病害は猛威をふるった。植えつけたものは全滅し種イモをとるのも危うい。

病害の正体は、ほとんどカビに侵されたものだったが、人間の病気も医薬と宗教と呪術とがごっちゃになってうろたえるだけだった当時のヨーロッパでは、枯れ腐ったじゃがいも畑を前に、農民は、茫然とするしかなかった。

「種イモを救おう」

「どうしたら、いい種イモを得られるか」

フランドルの植物学者ヴァン・バーフェンが論文で呼びかけたのをきっかけに、ヨーロッパ中がじゃがいもの研究に本気になった。まだ花がついているうちでも、土中を探って根に塊茎ができていたら、その一番早くできたじゃがいもがいい種イモになる——というフリースランド方式はこうしてみつけだされたのだが、アイルランドではその時まで待てなかった。

1841年の住民818万人が、1911年には440万人に半減したアイルランドの人口統計は、じゃがいもの病害に打ちのめされたのと、新大陸に希望を求めて移住していったのが複合した結果である。この小さ

な島国で、豊かな食べ物を与えてくれていたじゃがいもから見放された人々にとって、移住は生き残りを賭けて選んだ道だった。

三回にわたるアイルランドの凶作は、二百万を超える餓死者をだしたとさえいわれている。

じゃがいもは、こうした人々と一緒に、再び大西洋を西へ渡った。三百年ほど前に南米のアンデス山地から太平洋にでてパナマ地峡へ、さらにカリブ海から大西洋を越えてヨーロッパへ、インカ帝国の男女とともに東へ向かった海を、逆戻りしたことになる。

しかし、東へ向かった時に一緒だった白い人が、征服者コンキスタドーレスの栄光に胸を張っていたのに比べて、西へ向かう白人は貧しかったし、悲惨だった。じゃがいもが全滅したアイルランドの大地を後に、カナダのセント・ローレンス河畔に向かった89,738人のうち航海中に5,293人が死に、到着した直後にさらに10,037人が死んだ記録が1849年にある。

六人に一人が死んだ悲惨は、第一に栄養失調で航海に耐えられなかったこと、第二に飢えと貧しさからくる不潔さで、チフスなどの病気が発生したことによる、と同じ記録は伝えている。三回の凶作で二百万人が餓死したことからすると、小さな島に残れば四人に一人は死ぬ、それなら六人に一人が死ぬ新大陸への移住は、それでも少しはましだったのかもしれない。

たぶん、アイルランド移民より前にヨーロッパから移住して行った人々も、大なり小なり同じ思いをしていたことだろう。畑を手放した農民。羊の放牧地を囲われてやっていけなくなった牧人。都会に流れ込んだ浮浪者。物の値上がりで暮らせなくなった人――。

シャンプランに率いられたフランス人が、カナダのノバスコシア半島に上陸し、ケベック市の礎を築いたのは1606年に遡る。イギリスの清教徒が、メイフラワー号でサザンプトン港を出発し、ニュー・イングランドを建設したのは1620年だった。

麦は燕麦と大麦

それよりもトウモロコシ　じゃがいもが適している

綿花も適している

家畜の飼料は豆とクローバ草

野菜はトマト

アメリカのメイン地方からイリノイ、ミシシッピ一地方にかけて、十七世紀後半の開拓史に残る植付作物の記録は、アイルランド移民よりはるか前に、もうじゃがいもが新大陸にもたらされていたことを物語っている。もし、そこにアイルランド移民が持ってきたじゃがいもがあったとしたら、それは六人の一人が死ぬほどに飢え、病みながらも、新大陸に賭けた希望のための種イモだけは残した、辛抱と我慢の末のものだったに違いない。

南米のアンデス山地を出発したじゃがいもは、いずれにしても地続きの北米に里帰りして、貧しい白人を救ったのだった。

新大陸への里帰りとはまたさらに逆に、じゃがいもはヨーロッパ大陸を東へも渡っていった。

イタリアのモンズ市長ド・シブリーから、1588年にじゃがいもを贈られたフランダースの植物学者クルシウスはじゃがいものことを記した

『植物史』を1601年に出版したが、スイスのバーゼルに住む植物学者ガスパール・ボーアンなる者が、食用になる塊茎を意味するソラヌム・ツベロスム・エクスレンツムという学名をつけている、と紹介している。

いまの学名ソラヌム・ツベロスムとほとんど同じ名は、じゃがいもが南米アンデスの山地を下ってから六十年ほどのちには、ヨーロッパの屋根といわれる山国スイスで、もうつくられていたことになる。

その隣国のドイツでは、相次ぐ戦乱で食料が武器同様の大事なものを痛感したフリードリッヒ大王が、じゃがいもの栽培を全国にひろげた。

1688年にはじまるオランダとイギリスの、7年戦

争、1702年からヨーロッパ中を巻き込んだスペイン継承戦争、1756年からのフランス・ドイツ7年戦役——。戦争もまた自然の凶作に劣らない不作、飢饉を生む。

「戦争でない限り、四月中に兵士をして種イモを農村に運ばせること」

「官吏は、五月初めに植え付けを検証すること」

ドイツの軍人にも役人にも前代未聞のこの命令は、じゃがいもを植え付けなかった農民は鼻と耳をそぎ落とす罰則とともに、どれほど国王が荒廃と飢えを憂えていたかを物語っている。

フランス・ドイツ7年戦役で捕虜となったフランス人も、それを身にしてみても味わった。

捕虜の間、それで食べつないだセーヌ地方の薬剤師パルマンチェは、帰国すると国王に請願し、パリ郊外レ・サグロンに20ヘクタールものじゃがいも畑を作り、種イモを農村にひろめている。

こうしたヨーロッパ各国に学びにいった若き日のロシア皇帝ピョートル一世も、じゃがいもというそれまでのロシアにない作物を知った。1697年に、オランダの造船所で身分を隠して四が月に渡り働いた皇帝は、造船工と肩を並べての昼食で、実際にじゃがいもをかじったことがあるかもしれない。

1483年にはモスクワはるか東のウラル山脈を越え、東方に勢力を伸ばしたロシアは、1587年にシベリア最初の町トボレスクを、次いで1604年にトムスクと次々に町を建設し、ついに1632年のオホーツク建設で太平洋にでた。大森林タイガと、凍土ツンドラが覆うシベリアを東へ進むロシア人にとって、寒冷の南米山地に生まれ、北国ヨーロッパの冬にも耐えてロシアにまでひろまったじゃがいもは、文字通り命の糧となった。

ウラルを越え、シベリアを渡り、太平洋の潮香を再びかぐことになったじゃがいもを、世界の探検航海史に不滅の名を残すクック艦長指揮下のイギリス海軍将兵が知っている。1799年2月、クックはハワイで原住民の急襲にあい、不幸な死をとげたが、指揮を引き継いだクラーク艦長は、クックが予定し

ていたとおりカムチャッカ半島のペトロパブロフスク港に向かい、越冬とその後の準備を行った。船の手入と食料の補給である。

この港はロシアの総督ベーム少佐の管理下にあったが、食料その他の物資を集めるのに総督自身が自腹をきってまで手助けし、そのお蔭で艦は6月16日に出港することができた。土地柄から入って、サケなどの魚を得るのは容易でも、航海に欠かせない塩漬け用の肉や新鮮な野菜を集めるのは、総督の助力がなければむずかしかっただろう。

クックの遺命をつづけさせたのは、ロシアの好意ということになるが、そのなかにはヨーロッパ・ロシアからシベリアを越えてきたじゃがいももあった。

なにしろカムチャッカ半島とオホーツク海をへだてたサハリン（樺太）でも、原住民のアイヌ族すらロシア人にならってポテトのカルトウフエリを植え付けはじめていた、とアメリカの植物学者ラウファーはアメリカの栽培植物の伝播に関するシリーズ著作の一つ『ポテト』のなかで記している。

（つづく）

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

- ① 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9
100 años de historia de la inmigración
japonesa
en Bolivia を原典として2012年までを追
補 在庫あり
- ② 『ボリビアに生きる』 2000-3 日本人ボリビ
ア移住 100 周年誌 在庫 1 冊
- ③ 『大地に生きる沖縄移民』 2005-12 コロニア・サ
サ入植 50 周年記念誌、在庫 1 冊
- ④ 『ラパス日本人会 90 年の記録 1922-2012』
2012-10 在庫 2 冊
統一価格 ①-④とも 2500 円(税送料込) ご注
文は下記当協会までメール又は電話でお名前、
ご住所、電話番号、書籍名、冊数をご連絡くだ
さい。
メール: admin@nipponbolivia.org
電話番号: 042-673-3133
お支払は銀行振込でお願い致します (口座番
号、名義人は発送時ご連絡します)

協会関係活動の近況

7月3日～22日 杉浦専務理事ボリビア各地訪問
7月7日 Feria Cultural Japonesa (リベラル
タ日本ボリビア中央文化協会主催)
ボリビア・ベニ州・リベラルタ市役所前広場 杉
浦専務理事出席
8月5日 ボリビア独立記念日イベント(在日ボ
リビア大使館主催) 三重県桑名市 NTN 総合運動
公園サッカー場 椿会長 杉浦専務理事出席
8月11日 ボリビア独立記念日イベント(在京ボ
リビア人有志主催) 墨田区施設 杉浦専務理事出
席

8月11日～12日 ボリビア沖縄県人移住 110 周
年記念式典(同実行委員会主催) オキナワ第一移
住地日ボ協会文化会館 渡邊相談役、長嶺常務理
事出席

8月31日 ボリビア映画上映会 (当協会主催)
西麻布・ラテンアメリカサロン 計 36 名参加

編集後記

カントウータ 33 号をお届けします。この 6 月
28 日～7 月 8 日にかけて台風 7 号に梅雨前線が重
なって、西日本を中心に集中豪雨が襲い、さらに
8 月 6 日未明には北海道胆振地方で震度 7 の大地
震が発生するなど、このところ日本は災害続きで
す。

一方、現在は冬の季節に当るボリビアでも、ラ
パス、オルロ、ポトシなどの西部高地(アルティ
プラーノ)の各州で今年は例年になく積雪が多く、
道路交通がかなり影響を受けています。また 2 月
6 日には溪谷地帯に属するコチャバンバ市周辺で
豪雨による土石流が発生し、日本人の元シスター
野原昭子さん運営の身障者福祉施設・聖マルティ
ンの家も多くの被害を受けました。

上記 8 月 31 日のボリビア映画上映会で併せて
復旧のための募金を行い、参加の皆様に多額のご
協力をいただきました。この場を借りて厚く御礼
申し上げます。

尚、今号より文字の大きさを少し大きくし、読
みやすくしました。

編集委員 椿 秀洋 杉浦 篤 細萱恵子

Copyright© 2002-2018

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)